

協同的な遊びを導く保育方法の検討

A Study on the Method of Childcare
that Encourages Cooperative Play

石 動 瑞 代

ISURUGI Mizuyo

【要約】

新しく改訂された幼稚園教育要領では、乳幼児期の教育の重要性がこれまで以上に強調され、主体的・対話的で深い学びの実現を目指す内容となっている。本稿は、幼児期に必要な学びを育むとされる「協同的な遊び」を導く方法について検討することを目的に、2つの手法による保育実践研究の分析を行ったものである。プロジェクト型保育の実践研究では保育者へのインタビュー結果から抽出した概念分析によって、事例検討による保育実践研究ではSICS活用後の保育内容を分析することで、いずれも協同的な遊びを導く有効な手法であることを確認した。加えて、エマージェントカリキュラムの考え方による“ボトムアップ式協同性概念”が重要であると同時に、“ウェブ図”の活用によって保育プロセスを可視化することで、より質の高い協同的な遊びを導くことが示唆された。

キーワード 幼児教育 協同性 遊び カリキュラム ウェブ図

問題と目的

1 幼児教育における3法令改訂(定)の意義

平成 29 年 3 月、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の3法令が同時に改訂(定)された。背景には、平成 27 年にスタートした子ども子育て支援新制度によって幼児教育の共通化及び質の向上が求められていること、小学校以降の育ちへの連続性がこれまで以上に重視されていることがあげられる。特に近年、乳幼児期の教育の重要性を示す研究結果^①が国内外で発表されていることから、「乳幼児期に身につけるべき力」の内容を具体的に示し、小学校以降の教育との一貫性のもとで、幼児教育が位置づけられることとなった。

新しい幼稚園教育要領では、幼児期の見方・考え方の特性を明確化するとともに、小学校以降に続く「子どもの中に育つ力」を整理し、「資質・能力の3つの柱」として示している。また、育ちの具体的な目標として、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」が記載されることにもなった。これらはあくまでも、従来の環境を通して行う保育、遊びを中心とした活動を通して身につけていく姿である²⁾。

このような姿を日々の保育実践の中で育むためのポイントとして、保育者は「主体的・対話的で深い学び」の実現をめざし、絶えず保育を振り返り環境構成や援助を行うことが示されている。子どもが周囲の環境に興味・関心をもって関わるだ

けでなく、見通しを持って取り組むことや自らの遊びを振り返ること。他者と思いや考えを伝え合い、協力し合うこと。そのような体験を通して、心を動かしながら学びを深めていく「プロセス」を意識した保育、すなわちカリキュラムマネジメントの確立が求められているのである。

2 協同性を育むこと

主体的・対話的で深い学びの実現には、協同的な遊びの展開が欠かせない。「協同性」は、平成 20 年の幼稚園教育要領改訂で初めて盛り込まれた内容である。改訂前の中央教育審議会において、小学校教育への接続性を図る観点から「協同的な学び」という語が使用されたことに起因するものである。しかし協同的な遊びの展開は、単に子どもたちが目的に向かって協力しあう集団活動を意図するものではない。遊びを通して、子ども相互の関係が深まり、思いを伝え合ったり、自己調整をはかったりする体験の中で、創意工夫・試行錯誤を繰り返し、そのプロセスを喜び合う点に重要な育ちがあると考えているのである。

本稿では、協同的な遊びを導く保育方法を、筆者が助言者として関わった 2 つの保育実践研究を通して検討するものである。中でも、子どもの興味・関心に基づき、主体的な学びを生かした遊びの展開プロセスを支えるうえで、有効なカリキュラムについて考察していきたい。

方 法

県内の 2 地区で行われた保育実践研究から、協同的な遊びの展開を支える要因を分析する。

1 プロジェクト・アプローチをとり入れた保育実践における協同的な遊びの展開

富山市の Y 保育園では、「地域の特性を生かしながら子どもの主体性を育む保育実践」を目指して研究に取り組んでおり、地域の祭りをテーマとし

たプロジェクト型保育の実践によって、2 つの協同的な遊びの展開例（3～5 歳児、異年齢児クラス）を紹介している（2012 年 4 月～10 月）。この保育実践の取り組みに助言者として関わった筆者が、取り組み後に行った Y 保育園の保育者（10 名）を対象とする半構造化インタビュー調査を通して、協同的な遊びを育む援助や環境構成の要因を探る。

2 SICS³⁾ の「夢中度」の評定を取り入れた事例研究にみる協同的な遊びの展開

朝日町の保育士会が、「人とかかわる力を育む～夢中になって遊ぶ姿を求めて～」というテーマで、3 か年の継続研究に取り組んでいる（2015～2017）。筆者は助言者として参加し、SICS の夢中度評定と 5 つの観点による分析シートを使用した事例分析を行うことによって、子どもが夢中になって遊ぶ姿を支える援助を探っている。本研究では、事例分析後の評価をふまえて、5 歳児クラスにおいて取り組まれた保育実践事例を通して、協同的な遊びの展開を育む方法を検討する。

研究内容

1 プロジェクト型保育実践を通しての評価

プロジェクト・アプローチとは、アメリカやイギリス等で取り組まれている保育実践方法の 1 つで、近年はイタリアのレッジョエミリアでの実践が注目されている。その内容は一律ではないが、概ね次のように定義できる。プロジェクト・アプローチとは、あるテーマについてある程度の期間、継続して取り組みながら子どもが自らの興味や疑問を探究していくことを目的としており、その文脈や環境を設定していくことを中心に行われる保育である。テーマの設定や活動の進め方が、より子どもを主体としている点で、テーマ活動とは区別される。Y 保育園では、次の 3 点の特徴をもつ保育方法として、地域の祭りをテーマとしたプロ

プロジェクト型保育実践に取り組んだ。

(1) プロジェクト・アプローチの特徴

- i 子どもの興味・関心にもとづく主体的な活動を重視すること
- ii 実践は、①話し合い ②フィールドワーク、③表現、④調査、⑤展示の5段階とする。
- iii web方式の計画＜web＝クモの巣＞
子どもの興味・関心を捉えて、学びや経験を予測しながら表現すること。

(2) 実践結果

Y 保育園は、伝統的な地域の祭り（5月の曳山まつり、9月のおわらまつり）が盛んな地区に位置するため、例年、祭りのごっこ遊びが登場する。しかしプロジェクト型保育実践を行うことで、例年よりも、ごっこ遊びを十分に楽しむ子どもたちの姿が見られた。具体的には①気づきの共有、②あこがれと表現、③本物らしさの追求が、遊びの中で見られた。

興味・関心がクラスや園に広がることで、テーマについての気づきを言葉や文字、絵など、様々な表現方法を用いて伝えたいという欲求につながった。その結果、みんなで遊ぶことの楽しさや、異年齢の子どもも含めて役割を分担しながら遊ぶ姿につながった。また、身近に憧れのモデルがいる環境から、真似て表現する姿や、よりうまく表現しようとする姿が見られ、見る・見られる関係が生まれた。さらに、ごっこ遊びに必要なモノの制作において、より本物らしさを求めるようになり、観察力や探究心をもって制作に取り組み、環境の特性を自らの遊びに取り込む姿や、自分らしい表現を楽しむ姿が見られるようになった。

このような効果については、保育者のインタビュー分析から確認できたものである。筆者が以前行った研究結果では、プロジェクト型保育実践の評価についての語りは、13の概念からなる3つの

カテゴリ—概念にまとめられている。以下にその概要を示す。

(カテゴリ 1) つながりによる相乗効果

概念 1 伝えあう力

自らの気づきや思いを、保育者や友達にむけて表現すること。また他者の気づきや考えに耳を傾けて、それに対して意見を述べること。

① 子ども達の姿勢がね・・・、なんか新しい発見があるがじゃないかというふうに変わって・・・。もう「伝えたい!」、お友達から聞くのもやっぱり「あ、そうなんだ」みたいに。そういう、互いに伝え合ったり話したりするっていうことが上手になっていったというか・・・。

② 「自分の知っていることを聞いてくれる」「その思いを必要とされている」とわかってきたというか、最初は、対保育士に話す感じだったんですが、何回もやるうちに、私たちが出る前に子ども達がずっと出てきて（話し）、それに対して「俺も知ってる」と進んでいくので、テーマが削られ、絞られていった。

③ 細かいところをもう一回子どもに返して、もう一回言ってみて、さらにちょっと深めていく・・・行ったり来たりすることで、みんなの調べたことが合体した時に、「これが曳山だったよね」という感じで・・・。みんなの考えっていうか気づきが合わさった時に、満足感とか達成感を味わえるんだなと感じました。

④ (先生の)みんながどんなことをしているかわかっていると子ども達のほうで思ってくれたのか、「今、こんなんしててね」とか気さくに言ってくれるようになった。前は、以上児の先生じゃないから言ってもわからんかなあというところがあったんですけど・・・。

概念 2

異年齢児保育での育ち（憧れ、思いやり）

年上の子どもが取り組んでいることに関心を寄せて真似しようとする姿や年下の子どもに配慮を見せる姿が見られること

① 子どもたちなりに小さい子に「乗る？」と聞いたり、5人しか乗れないので、年少さんは数がわからなくて乗ったりすると、年長さんが「1人降りられ」と言ったりして縦の関わりが見られるようになって・・・。

② 年齢別活動はしているけれど、クラスで1つの遊びをする中で、お兄ちゃんを見て、年下に教える。「あんながしたい」「こうするんだよ」「じゃ、もっとこうしよう」とみんなで育ってきたとすごく感じて・・・。特に3歳児のDちゃんは、お兄ちゃんのまねをしたい気持ちで、すごく伸びていった・・・。

概念3 共同性・協同性・協働性

保育者、子ども、家庭や地域と一緒にプロジェクトテーマに関わり、協力しながら、それぞれの役割を果たそうとしていること

① やっぱり個性を認め合っているというか、「俺は新(踊り)ができるけど、新(踊り)が難しいと思っている人は、旧の踊りでやればいいんだぞ」とか。先頭はやっぱり年長。(でも)Aばかり先頭だともめてしまって、後ろと前のリーダーを変わったりして・・・。それぞれの性格とか個性とか、わかり合って遊んでいましたね。

② 職員それぞれいいところ、長けている部分とかあると思うんですけど、同じ方向、「ここ」というのを決めて話し合っていくこと、同じ思いをもつことが大事だと再確認しました。子ども達がどんなことに興味をもっているか、いっぱいある(興味の中)からどれを選ぶのか、選んだらこっちの興味にもつなげんなんね・・・。難しかったです、話合うことで、いろいろな意見も聞けるし、整理ができました。

③ 子どもがわからないことを、「じゃ、調べ

にいこう」みたいに、すぐ行動にすることというのは今までなかった・・・。それを1つ出すことで、子ども達が調べてきてくれて、子どもから人に伝えようというふうにつながってきて。そしてまた、反応が返ってきて。保護者の人たちも「今日はあそこでこんなんあるよ」と言ってこられて、公民館長さんから「来られ～」と声がかかったり・・・。子ども達が家で話すことも、おじいちゃん経由で伝わって・・・。

概念4 保育への積極的関心と参加

家庭や地域の人々が、保育内容に積極的な関心を寄せ、自然な流れの中でプロジェクト活動に参加していくこと

① (子どもが)楽しく遊んでいたり、何かに取り組んでいたりする姿っていうのは、やっぱり保護者にとっても心地よいというか、すごく喜んでおられた。今までは、関心持たれない方は全く持たれなかったんだけど、今回は、皆さんが、子どものしていることに関心を持っているなというのがありましたね。(保育者が)着物を自分で着られるように工夫したら、「先生考えたぜ、上手」とかって・・・。いろんなことに興味をもたれて、保育の中にはいってこられた。入りこみ方が違いました。その中から(襟の留める位置など)ヒントをいただいたこともあったので・・・普段の保育にはないことですね。

② 「見たいわ」とお母さんたちも自然に言ってこられて、「じゃどうぞ」という感じで、これまで以上に保育が伝わっていたと思います。(それで)おわらごっこの前夜祭なんか、思いもよらない展開になって・・・。それがまた子どもたちにもすごくよかったんです。私たちのプロセスには前夜祭(をやる案)はなかった。

概念5 地域への愛着

自らの育つ町、地域に対して特別な感情をもつこと

① 子ども達から、Y 町の人の話や経験を細かく聞く機会もあったし、自分たちから出て行ってそれに対する反応もすごくたくさんあったので、自分もすごく Y 町に愛着ができて、子ども達と一緒にここで生活しているという、地域との距離感が狭まった。地域の中で、すごく愛されて育っている子ども達の姿が見えてきて…。
 どんどん地域に自分たちが出ていくことは、子どもももっと理解できるし、私たちも理解してもらえるし、私たちも地域の人を理解できるし、なんか大きなバレーンの中ぼわんと入ったような感じがして、うれしい感じがしたというか、地域をありがたく感じるというか…。

② 子ども達もやっぱり、(子ども会の発表で)、好きになった Y 町とか、体験から得た、曳山やおわらについての自分の発見を、自信をもって言えたことが、絶対(自分の)自信になっているんですよ。

③ カブラに熱中していた子が、近所の子が(おわらごっこ)をやっていると、「俺も西町!」とかいってカブラをやめて遊びに入っていく…。
 いろんなつながりが生まれて、楽しいなと思いました。

概念6 次世代育成

子どもが地域文化にふれて育つこと。文化継承への期待。

① やっぱ、Y 町の伝統文化をみんなで盛り上げていこう。Y 町の継承をしていくのはこの子たちなんだという思いが、町の人の中にあるんでしょうかね。

② 子ども達の気持ちを高めたといえば、保育のこともですけど、地域の方々の思いみたいなのが、出かけていくことで(子ども達に)伝わる面がたくさんありました。保育所が町にやってくる、その子たちに応えてやろうという、熱い思い…。

(カテゴリ 2) 興味・関心の焦点化による保育力の向上

概念7 見える化(ウェブ図・展示)

ウェブや展示によって、子どもの興味・関心の動きや経験内容等のプロセスが図式化され、目に見える形となること。

① ウェブというのが、すごく自分の中ではわかりやすいというか、子どもの興味・関心がわかりやすくて…。だれがどんな興味関心をもったというのをまとめるのにすごく助かったし、全体的には、こっちのほうに興味があるのねとまとめやすいし、準備もしやすい。遊びの方向性が見えやすいなと思いました。

② (ウェブは)難しい長い文章ではなく、図でポイントがでてきたので、(職員同士)共通理解しやすかったですね。

③ 展示することで、地域の人とのつながりができたのかなと思う。お母さん同志の話の中にも、展示したことが話題になったり…「保育が見えたのかな」って…。

概念8 エッセンスのふりかけ

子どもの主体的活動の展開を促すために、保育者が意図的に、興味・関心の誘発や保育環境の準備等を行うこと。

① 保育者の導きはあったほうがいいですよ。子どものあいうそごく意欲的な姿があるのに、普通に踊って、「踊り好きやね〜」だけで過ぎ去っていたと思います。あそこまでの、いろんなことを知ったり考えたりする力を引き出してあげられていなかったのだと思います。

② (今まで足りなかったのは)もっと楽しませてあげるにはどうしたらいいのかなという自分たちの探究心というか、子どもが気づいてくれるのを待って、「ああ、いいところ気づいたね、じゃあ」とやっていたんだけど、あそこのエッセンスのふりかけが足りなかったんだなと思っ

た。子どもがわかるように、気づけるように、周りからかけてやるエッセンスを工夫すればいいんだよ…って言われて、そうだよ、エッセンスをふりかけないで、子どもの気づきがない気づきがないと言っていたんだと…。

概念 9 本物志向による観察力・探求心

より本物に近づきたいという思いから、子どもの観察力や探究心が高まっていくこと。

① (調査を通して) 子ども達がよく見るようになった。私が適当にぼんぼりを五角形でつくって飾ってたら、子ども達は「いや、6つだよ」と言いに来て…それで作り直したんです。目標とするものが近くにあるからかな。より本物に近づきたい、本物に近いものを作りたい、作ってみたいという子ども達だった。

② 不思議だなとか、何で?と思ったことを、すごく聞いたりしてくるようになったと感じました。なんだろうと(不思議に)思っても、「ま、いいか」ではなくて、「先生、なんだろう」と言ってきて、探究心が強くなったのかなと思いました。

③ 私たちの思い以上に、本物を意識して、僕の町はこんなじゃないとか、僕はこんなにしたいと確認しあったり…踊りも、うちの町はこう違うと得々とみんなの前で説明したり…。

概念 10 間主観性

子どもの思いを保育者が感じとり、緊密感を感じながら、子どもへの関わりを逡巡し、戸惑ったり、喜びを感じたりすること。

① 今まではそんなに無理はしませんでした。絵を描くときでも、わっと描く子もいるけれど、描けない子には「うん、わかったよ、大丈夫」とすぐにひきさがる。「描けるときに描こうね」「見ながら描こうね」って、ちょっと自分がひきさがるところがあったんです。でも今回の場合は、何かできるんじゃないのかなと…。決し

て、やりなさいなどと言ったわけではない。もちろん気持ちを受けとめて、この子はここまでだったら大丈夫かなとか、ここまではちょっと一緒にやってみようかなという関わり。ちょっと寄り添うじゃなくて、すごく寄り添うみたいな…。うまく表現できないんですけど…(距離が近い感じを体で表現)。

② 3歳の子がやりたい思う気持ちにに応じてあげたいけど、今、やってあげたら、せっかく5歳児の子が探究していることをダメにしてしまうんじゃないかと…タイミングが難しくて…悩みました。

③ (子どもの興味や関心に沿って) ウェブを書くのは、とても楽しかった。

(カテゴリ 3) 個性の発現

概念 11 経験の深化と表現

集団としてのプロジェクトでの経験が、個の中で消化され、個々の表現となって現れること。

① 展示(の表現)は、子ども達の中で、やってきたことがすべて入って、外に現れるということかなと。

② あの～、はっぱを描いて、個々の工夫とかそういったことまでには期待していなかったんです。…作ることを楽しんでくれればいいなと思っていたんですけど、…それで自分たちなりに模様を描きだしたんですね。オリジナルの「はっぱ」ができてきて、…手の動きや足の動きも、貼る中で「こうやって踊るとるが」というのが子ども達の口からでたので…経験と表現が結びついている…そこが発見でした。

③ 子どもが、興味があるなと思ったことに対して、「これ楽しい」って言うんじゃないくて、「これはこうだから楽しいね」とか、自分の言葉で楽しいと思えることをちょっと言ったりとかする(ようになった)。3人の女の子の会話でも、

「これ何々したら楽しいね、もっとこうしたら楽しいね」って…。

概念 12 それぞれのもりあがり

プロジェクト活動全体の盛り上がりから終結までの展開に影響を受けながらも、個々の参加や熱中度

- ① 3, 4歳の時は自分の踊りに酔いしれて踊るんですが、年長になったら恥ずかしがって、踊らなくなっている子。興味はあるけど恥ずかしいから、見ているもやらないという姿があり…。でも(祭りの)企画を始めた時に、すごくやる気になったんですね。そこから変わりました。
- ② 最初はべんべんって音がでればよくて、友達と一緒にだけで(三味線づくりに)満足していた子が、本物に近づきたいし、もっと上のことをやりたいという気持ちが芽生えたりして…。3日(公開保育日)には、ある程度できて、友達と演奏もできたけど、まだまだ楽しみたいという気持ちがあって、「他の子は三味線だったけど、自分は胡弓にしたい」とその後も、もりあがった気持ちで作っていました。

概念 13 表現の選択

プロジェクトのテーマに沿って多様な表現の可能性が生まれ、子ども自身が表現方法を選びとっていくこと。

- ① 3歳の子が「ぼく、難しい」、「おわらの踊り、難しい」ってぼつりと言った時に、「そうだよね〜」と思って、(手をつないで)見るほうにまわって、話をしていた。でもそのうちに、「ぼく、三味線ならできるかもしれない」って自分で言ってきたんです。
- ② 4歳児の女の子。1つのことには没頭するけど、みんなとの行動は苦手なお子さん。「みんなで行くよ〜」と(クラスの雰囲気)がなってもついてこない。年長さんの女の子が「行こうと

誘っても「私疲れる」って…。何とか誘って連れて行っても寝そべって…。別にみんなが意欲的じゃなくても、この子なりでいいのかなと思っていたら、そのうちに部屋に戻ってきて、絵を描きだして…、「先生、これ三味線、これ踊っとるが」って、おわらの絵を描いたり、折り紙でおわら人形をつくったりしはじめたんです。

保育者の語りから分析された概念をみると、子どもたちが地域の祭りをテーマとしたプロジェクト活動の中で、身近な環境である保育集団の中の一員としての存在感を感じ、集団の遊びの流れに自分なりの関わり方を選択しながら、経験の中に意味を見出し、自己発揮している様子がうかがわれる。まさに、協同的な遊びを通して、主体的・対話的で深い学びが実現しているといえる。これらの概念構成を図示したものが、図1である。

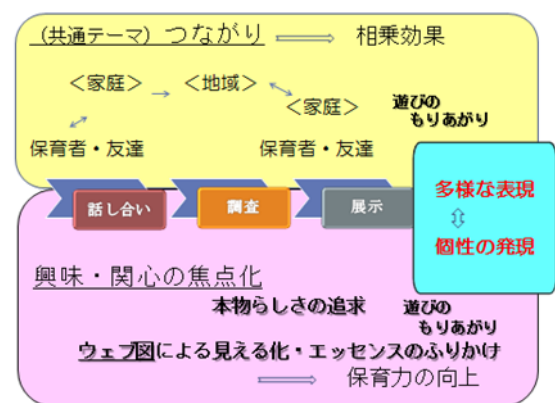


図1 プロジェクト型保育実践の評価

2 SICS を用いた事例検討による、5歳児保育実践から

朝日町の保育研究では、子どもが夢中に遊ぶ姿を「没頭」「試行錯誤」「協同」が見られる姿と定義づけ、その内容は年齢によって異なるという共通理解⁴⁾のもとに、エピソード記録を書いている。5歳児の夢中に遊ぶ姿には、夢中・集中・継続する「没頭」や、工夫して試す中で、課題を把握し、

目的の達成にむけて努力する「試行錯誤」、仲間とイメージを共有し、相互にやり取りをする中で目的を共有し、協力しながら遊ぶ「協同」の3つが見られ、夢中度が高いと思われる事例ほど、それぞれの内容が豊かに見られた。提出された事例の夢中度にはバラつきがみられたが、それぞれの事例を5つの観点（「豊かな環境」「集団の雰囲気」「主体性の発揮」「保育活動の運営」「大人の関わり」）で振り返りながら討議を進めることで、改善点を見出し、望ましい環境や援助についての検討を継続している。現在は、5つの観点ごとのポイントを整理しながら、夢中に遊ぶ姿に必要な環境構成と援助をまとめている途中であるが、おそらく、この作業プロセスそのものが重要な意味を持つと思われる。すなわち、「協同的な遊びを導く」ためには、「夢中度」を中心に子どもの姿をよくとらえ、周囲の環境について5つの観点で分析しながら、実践していくことが有効なのである。そしてさらに、そのプロセスを「見える化」することが大切である。

本研究では、5歳児の事例について具体的な検討を行った。子どものつぶやきから始まったお化けへの興味を、担任が大切にとりあげながら環境構成や援助を行う中で、お化け屋敷ごっこへと盛り上がりを得た内容であり、5歳児らしい協同的な遊びが導かれた事例である。この事例では、SICSの5つの観点で分析することで、子どもたちの姿を適切に理解する一方で、時間的な環境の不足に気づき、クラス運営や職員間の連携での工夫を行っている。子どもたちの興味・関心に沿いながらの遊び展開は、ハロウィンでの活動や運動会での競技にまで継続した取り組みとなった。このように、家庭をも巻き込んだ継続的な活動へと発展した「協同的な遊び」は、SICSの活用による保育実践と振り返りによって導かれたと考えられる。子どもの経験の質を子どもの側から評価する

SICSの特徴がいかされているといえるだろう。

また事例を担当した5歳児クラスの担任は、5つの観点の分析シートに加えて、ウェブ図の活用を行うことで、「子ども同士の関わりや遊びの展開について、見通しや意図をもって関わる」という自己課題を解決することが出来たと報告している（事例夢中度は5）。あらためて、ウェブ図の果たす役割の重要性が確認できる事例である。

まとめ

プロジェクト保育実践は、①子どもの経験や興味・関心を重視したテーマ設定をおこなうこと、②話し合い→調査→表現→展示と段階的な構造をふまえ、大まかな方向性を意識した保育であること、③共通のテーマを意識しながら子どもの姿会をとらえた対話が職員間で行われることの3点から、協同的な遊びの展開に有効であると考えられる。そしてこれらは、今回取り組んだ保育実践が、エマージェントカリキュラムの考え方を基盤としたことによって、生まれた効果である。エマージェントカリキュラムは、子どもの中から現れる興味・関心から、学びの経験を組織化し、保育をデザインしていくカリキュラムである。中でも、ウェブ図（図2、図3）を使って、そのプロセスを見える化することの効果は大きいと考えられる。

一方、SICSを用いた事例研究による保育実践でも、①子どもの姿・経験からスタートする保育であること、②分析の5つの観点が示されていること、③対話のテーマが焦点化されることから、協同的な遊びの展開に必要な環境や援助への気づきを導いた。さらに、ウェブ図を活用することで、遊びの進展とともに起こる変化を見通すことが可能となった。

両者に共通することは、子どもと保育者の「今」に沿いながら、見通しを持って楽しんでいる点である。川田(2009)は、「協同性」が大人主導で描く

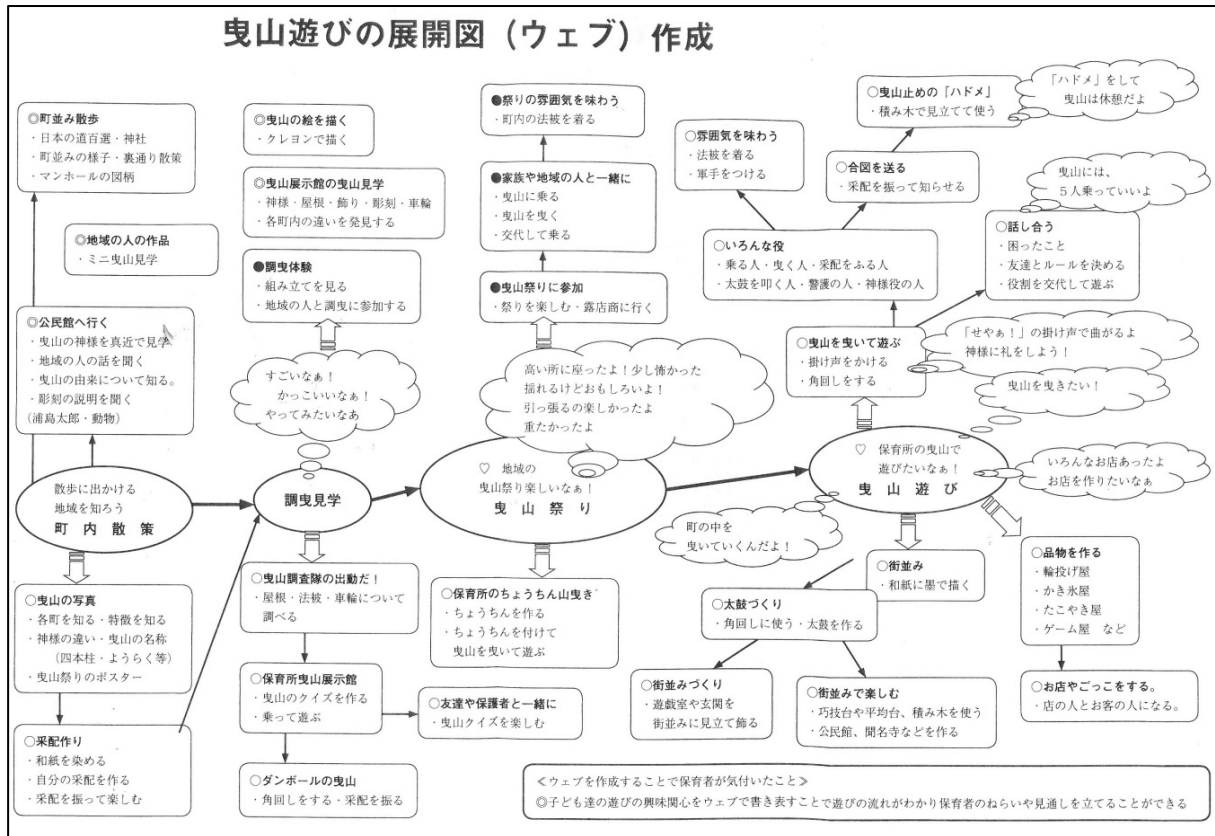


図2 プロジェクト型保育実践研究におけるウェブ図（平成24年度富山県保育士会研究会公開保育資料）

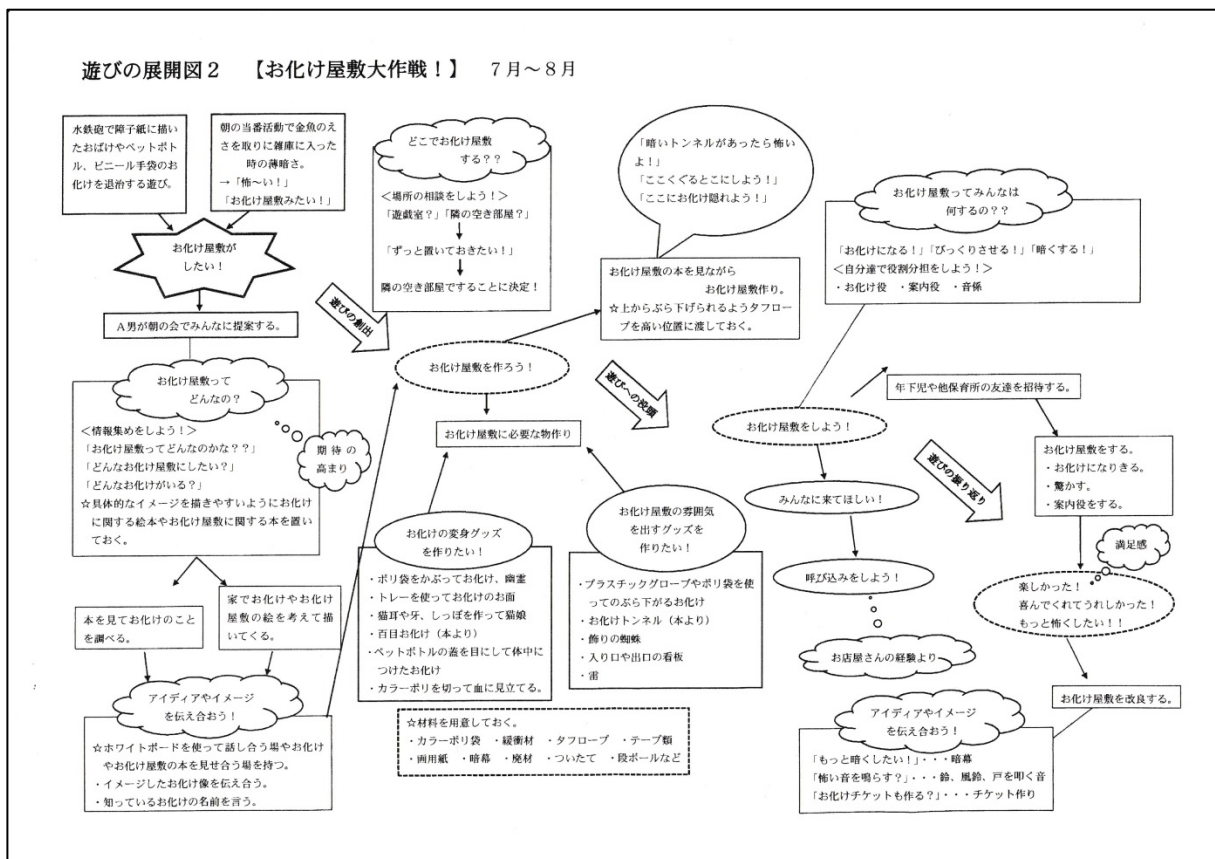


図3 SICSを活用した事例研究によるウェブ図（朝日町保育士会作成）

道筋ではなく、日々の保育実践から立ち上げていくボトムアップなものであることの重要性を述べている。また、加藤ら(2005)は、子どもたちの必要感と必然性をベースに保育が展開されることの大切さと、保育者の存在(黒子ではなく、姿の見える保育者)があつてこそ、協同的な学びが生まれることを強調している。一方で、保育実践を行う側の津田(2009)からは、協同性にこだわれば、集団で何かをさせることに力が入り、集団からはみ出さないようにとの意図が強く働いてしまうという現実が語られている。

協同的な遊びは、子どもの主体性を重視するエマージェントカリキュラムの理念を基本としたうえで、遊びの方向性や子どもの思いの変化を明確に意識しながら進めることで、実現されるものであると考える。そのための方法として、ウェブ図は大変有効な方法であると考ええる。

私は、子どもを理解するためには、子どもの今の思いを読み取る虫の眼と、遊びや子どもが置かれている状況を読み取る鳥の眼と、遊びや子どもがどのような方向に進んでいるかを感じ取る魚の眼が必要だと考えている。最近事例研究の方法も多様に検討され、虫の眼としての理解は向上している。また、発達過程の理解や保育プロセスの評価方法も検討され、鳥の眼としての手法も開発されている。さらに必要なのは、子どもと共に過ごしながら、関心の方向や遊びの流れを見極める魚の眼である。そしてその理解の手法として、ウェブ図が大変有効であると考ええる。今後は、ウェブ図の活用についてさらなる検討をすすめていきたいと思う。

注1 幼児期の社会情動的スキルの獲得により、成人後の学力や所得の向上、犯罪率の低下などが期待され、経済投資効果が高いと言われている。シカゴ大学のジェームズ・ヘックマン教授

が有名である。

注2 幼稚園教育要領では「幼児期の発達に即して、身近な環境に主体的に関わり、心動かされる体験を重ね、遊びが発展し生活が広がる中で、環境とのかかわり方や意味に気づき、これらを取り込もうとして諸感覚を働かせながら、試行錯誤したり、思いめぐらしたりすること」とある。

注3 ベルギーのフェール・ラバース教授が「経験に根ざした保育・教育」という思想にもとづいて作成した自己評価尺度をさす。

注4 例えば2歳頃のクラスにおける「試行錯誤」は「試す」行為のほか、「友達や保育士の真似をしてみる」行為も当てはまると考えたり、楽しい雰囲気を共有している姿を「協同」に至るプロセスと捉えたりするということである。

引用文献

- ・文部科学省(2017)『幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型認定こども園教育・保育要領(原本)』チャイルド社

参考文献

- ・阿部和子・前原寛(2009)『保育課程の研究—子ども主体の保育の実践を求めて—』萌文書林
- ・「保育プロセスの質」研究プロジェクト(2010)『子どもの経験から振り返る保育プロセス～明日のより良い保育のために』幼児教育映像制作委員会
- ・川田学・津田千秋(2009)『幼児期における協同生とその援助の視点を探る』香川大学教育実践総合研究 18 : 65-78
- ・加藤繁美(2005)『5歳児の協同的学びと対話的保育』ひとなる書房
- ・石動瑞代(2013)『プロジェクトを意識した保育実践への評価～保育者の語りから～』日本保育学会第66回大会発表要旨集 p 273